



書評

[評者]

平山 和美

仙台青葉学院大学教授・脳
神経内科学

《シリーズ・高次脳機能の教室》

失行の診かた

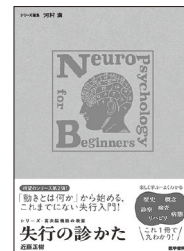
河村 満 シリーズ編集

近藤 正樹 著

●A5 頁200 2025年11月

定価：3,850円(本体3,500円+税10%)

[ISBN978-4-260-06272-5] 医学書院刊



本書は、失行の診療と研究に、いくつもの重要な貢献を続けてこられた近藤正樹氏による待望の解説書です。

「失行」は、高次脳機能障害の一つです。言葉話を話したり理解したりすることが難しくなる「失語」や、出来事を覚えられなくなる「健忘」などに比べて、なじみの少ない言葉かもしれません。失行では脳の損傷によって、習熟しているはずの道具が使えなくなったり、手指を細やかに動かすことができなくなったり、習熟しているはずの身ぶりが行えなくなったりします。行為ができなくなるのですから、生活上の重大な問題となります。失行でこれらの問題が生じるのは、力が弱い(運動麻痺)、持続的な筋収縮の程度が正しくない(筋緊張異常)、勝手に動いてしまう(不随意運動)、協調して動かすことができない(運動失調)などのためではありません。また、見たものが何かわからない(視覚性失認)ためや、ものの意味についての知識がなくなってしまった(意味記憶障害)ためでもありません。このような条件を満たす「失行」が起こりうることから、脳の中に上記の諸病態で損なわれている機構とは別に、行為そのものにかかわる仕組みのあることがうかがわれます。

失行の研究に最大の貢献をした Liepmann (1863-1925) をはじめとして、現在まで多くの人々がその仕組みを明らかにしようと努力してきました。また近年は、脳梗塞などの局所病変によるものだけでなく、アルツハイマー病などの変性疾患に伴って生じる失行も注目されています。不思議で、難しそうな

症状ですね。

しかし、心配は要りません。本書には、この症状を理解し、他の症状でないことをチェックし、生じている問題を抽出し、症状のある患者さんを支援していくために必要な事柄が、漏れなく、大変わかりやすく、丁寧に記されています。それは、各章のタイトルからもうかがえます。第1章「どうして、失行は難しいのか——『動き』と『道具』を手がかりに」、第2章「失行の『始まり』から『現在地』まで——失行の本質を理解する」、第3章「失行の原因——病変部位と関連疾患を理解する」、第4章「失行の評価と支援——診察・検査法と介入を理解する」、第5章「失行の教室——症例から失行を理解する」。

私は特に、第2章に記された、Liepmannの研究の道筋に心を動かされました。1人の患者さんと出会い症状をよく調べて仕組みについての仮説を立て、その後の複数の患者さんでの経験に従って仮説を修正、重要な点については(いまから100年以上前に!)多数例での検討を行ったという科学的な姿勢。第5章は、2人の研修医が指導医と会話し、さらに言語聴覚士や作業療法士、臨床心理士のもとへも訪れて、失行について学んでいく設定になっています。脳画像も豊富に示され、臨在感に満ちています。そこには、著者である近藤氏や氏の周囲の人たちの、温かなチーム医療の姿が反映されているように思われます。

皆さまも本書を手を、近藤氏の案内で失行を探る営みに参加しませんか？